

タイトル:平成 27(2015)年度 研究セミナー(第 16 回)

日程:平成 27 年 12 月 18 日(金)~20 日(日)

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階 マルチメディアセミナー室(306)

「南アジアにおけるムスリム市民社会の形成 — 英領パンジャブ・イスラーム擁護協会を事例にして」  
水澤 純人 (京都大学大学院)

本セミナーに参加出来たことは、私にとって、三点において有意義であった。一点目は、他地域・分野を専門とする研究者の方々からご指摘・助言を頂いたことである。表題に掲げた市民社会という用語が適応される時代、アラビア語・ペルシア語由来の、各種ウルドゥー語単語を翻訳した際の字義等、南アジア研究の文脈のみを意識してきた私がこれまで無自覚であった点についてご指摘を受けた。このことは、自身の立ち位置を相対化し、用語の定義の重要性に気付く上で重要な機会となった。また、言語や歴史を専門とされる方々からは、ウルドゥー語で書かれた一次資料を分析する上での幾つかの実践的なご助言も頂いた。これらは、史資料の扱いについて身近に相談できる人がいない私にとって、通常は得られない貴重なものであった。

二点目は、中東・イスラーム研究をより身近に感じ、自身の視座を、南アジア研究という文脈からより開かれたものへと転換させる契機となったことである。参加前の私にとって、中東・イスラーム研究は近くて遠い世界であった。それは、イスラーム世界における南アジアの周縁性と、日本の南アジア研究におけるイスラームの周縁性双方を私自身が内面化していたことに加え、地域の枠組みを超えた知的交流に今まで積極的に関わってこなかったためである。本セミナーを通じ、中東・イスラームへの関心を共有する方々と広く交流出来たことは、内面の枠を乗り越え、研究の意義をより広い文脈で問い直していく契機となった。

三点目は、博士論文の執筆に向け、意識転換を図る契機となったことである。何名かの発表者の方々は、博論の全体像の提示を通じ、構成や執筆に際する実際的な助言を受けていた。執筆に中々踏み込めず、博論の一つの章に該当する研究発表という形を取った私にとって、格闘する同世代の研究者の取り組みを知ることは、自身の不手際はさておき、大いなる刺激となった。

以上、本セミナーは、研究啓発上、私にとって極めて有意義であった。そして、三日間に渡る、厳しくも温かい議論と知的交流の場が可能となったことは、ひとえにアジア・アフリカ言語文化研究所の飯塚正人所長をはじめとする先生・事務局の方々、外部から合間を縫って駆けつけて下さった先生のご尽力の賜物であった。このことに改めて感謝申し上げると共に、今後も同研究所主導の下、このような若手育成の場が継続されることを願って止まない。